

使徒 11 章 19-30 節 「通称キリスト者」

キリスト教の教会に所属している人、イエス・キリストを信じている人のことを、「クリスチャン」と呼んだり、「キリスト者」と言ったりします。この「キリスト者」という呼び方を、改めて今日は考えたいと思います。

ステファノ殺害事件の後、エルサレムで迫害が起こります。使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリアの地方に散って行ったとあります。そして、今日の箇所が続きます。このアンティオキア教会のメンバーは、ユダヤ人ではなく異邦人が中心でした。彼らはユダヤ人以外の人々にも、主イエスについて福音をどんどん告げ知らせたのです。イエス・キリストは、わたしの救い主であり、そしてすべての人の救い主だ。ユダヤ人、ギリシャ人は関係なく、キリストは救い主だ。そうした彼らの伝道によって、アンティオキアの地の異邦人の中で、キリストを信じる者が多く生まれたのです。そうして 22 節にあるように、アンティオキアの地で、大勢の異邦人がキリストに立ち帰った。このうわさが、エルサレムの教会にも聞こえてきました。そしてエルサレムの教会は、バルナバを選んで、アンティオキアの教会へ派遣しました。バルナバは、アンティオキアでキリストを信じる者が大勢与えられたこと、多くの人が主に立ち帰ったことを、「神の恵み」と受け取って、自分の喜びとすることが出来る人でした。そして彼は、アンティオキアの人々に、固い決意を持って主から離れることがないように、と勧めました。私たちも、主イエスに救われて、洗礼を受けて終わりではありません。主イエスと共に生涯を歩み続け、恵みに留まり続け、神の国の完成を待ち望んで生きる、というのが信仰の歩みです。こうして、多くの人々が主へと導かれました。

さらにバルナバは 25 節以下にあるように、アンティオキアからサウロを捜しにタルソスへ出かけ、見つけ出してアンティオキアに連れ帰ってきました。バルナバは、異邦人中心のアンティオキア教会において、これから異邦人に向けて伝道をしていくにおいて、このサウロがまさに今必要である、と確信していました。二人は丸一年の間その教会にいて多くの人を教えました。こうしてアンティオキアの教会は、後に伝道の拠点となる教会へと整えられ、成長していったのです。

さて、このアンティオキアの教会の人々が、「弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになった」とあるように、世界で初めて「キリスト者」と呼ばれた人々なのです。このように呼び名を付けられるというのは、どういうことでしょうか。機会があれば、自分はキリストを信じたんだ、キリストに救われたんだ、そのように人々に語っていたのでしょうか。それを聞いていた人々は、ちょっとからかうようなニュアンスで「キリスト者」と言い出したのかもしれませんが。しかし教会の人々は、その呼び名を喜んで受け入れました。あえて「イエス者」ではなく、「キリスト者」と呼ばれるようになったこと。それは、私たちと共におられる救い主を強調するためだったのでしょうか。ですからいつか自分たちのことも、自分で「キリスト者」だと言うようになったのです。「わたしたちはキリストの者だ」。主イエス・キリストの十字架によって罪が赦され、復活の新しい命を頂き、終わりの日の希望を持って生きている。キリストが人生の中心におられ、キリストによって生かされている。自分たちはそういう者である。そういう意味を込めて、キリストの名前によって、自分の存在を言い表すことが出来るのです。「わたしたちはキリスト者です」。なんと喜びに満ちた自己紹介であり、また信仰告白です。

「わたしたちはキリスト者です」。そう、喜んで誇らしく名乗り、また「あの人たちはキリスト者だ」とキリストの名で呼ばれるような者になりたいと願います。